

## 真宗教学の近代化と現在

——浄土理解の変遷を通して——

木 越 康

## 本発表の目的

明治から大正・昭和初期にかけて、真宗教学は「西欧的近代思想」と出会い、大きな影響を受けた。本発表では、その時に受けた衝撃を「浄土理解」にまつわる問題を中心に見ていくことを目的とする。

これに注目するのは、ただ近代のはじめを振り返るといふ関心に立つものではない。題目に「現在」とあるように、考察の最終的な目的は「現代において浄土をどう理解するのか」にある。長谷正當は『欲望の哲学』において、「浄土の観念は、もはや現代の人間の実存に響くものをもたず、宙に浮いた根のない想念となってしまう」と指摘する。氏が指摘する「浄土」に対する感覚は、浄土教思想に何らかの形で関心を持つ現代人が何気なく懐いている疑念

であると言えよう。

もちろんこれまで真宗学でも、浄土をどのように捉えればよいのかについて、さまざまな解釈が試みられてきた。客観的現実世界として浄土を捉える態度は少なくなつたと思われるが、例えば浄土を実存に関わるものとして哲学的に解釈しようとするもの、世俗社会に対する批判原理として理解するもの、さらには浄土を語らずに「涅槃」や「空」などによって親鸞思想の「証(さとり)」を理解しようとするものなどがある。しかし、そのような態度に対して大桑斉は、民衆思想史という独自の立場から「そこには世界に冠たる偉大な思想家、親鸞が存在いたします。しかしながら、宗教者親鸞、端的に言えば、御開山聖人と呼ばれるような方が存在するのだろうか」と、疑問を呈している。

現在の真宗学は、近代化による劇的な転換の結果もたらされたものであり、浄土理解もその上に成り立っている。したがって現在において浄土を考えていく上で、その土台となる真宗教学の近代化を見ることは重要な意味を持つものと思われる。本発表では、現在のそのような状況を生み出す背景を尋ねることを通して、浄土理解の問題点と今後を検討していきたい。

## 浄土教思想と近代との出会い

近代真宗教学において、浄土理解に最も大きな衝撃を与えたのが野々村直太郎である。一九二三（大正一二）年一月二五日から『中外日報』紙上において「浄土教革新論」が連載されたが、これが当時の宗教界に大きな影響を与えたのである。

野々村はここで浄土教思想は「モハヤ現代および将来に容れらるべき思想ではない」と言う。阿弥陀や浄土の存在を認めた上で成り立つような信仰は近代人には受け入れられず、敢えてこれらを主張し続けるならば、浄土教は聖道門・難行道の修行よりも遙かに難しい道となると言うのである。

この野々村の主張に対し『中外』ではすぐに多くの反論が見られた。西本願寺の教学者梅田謙敬は、浄土は人間の「心」の問題であるから、これらを「心」から切り離して客観的存在を科学的に証明しようとしても本質は明らかにならないと主張した。また、西本願寺教団の指導者として活躍することになる梅原真隆教授も、人間に「信仰」を生じさせるはたらきを持つような神話的表现は、本質との間に必然的關係があり不可分離なものであるとし、浄土や阿

弥陀は親鸞思想や真宗の本質にとつて必然であるとした。

この議論は宗派や宗教を超え、次第に多くの人々を巻き込む形で、論点も多様化していった。しかし新聞紙上で浄土教批判が展開されたことにより、この論争は思わぬ方向に向かった。議論ははじめ、純粹に野々村の主張に対するものであったが、本願寺教団が野々村の主張に対し政治的に関与してきたため、問題の焦点が次第に歪められることになるのである。そして、最終的に紙上での論争は、教団による教学統制と学問の自由との問題に移行していくことになるのである。そのような中、大正一二年八月本願寺教団は野々村の僧籍を剥奪し、一二月二〇日には依願退職という形で龍谷大学から追放となった。論文が掲載されて後一年に満たないことであった。

### 金子大栄『浄土の観念』

野々村追放の明くる年の大正一三年、大谷派の金子大栄は「大乘経における浄土の観念」と題する講演を行なった。これは翌年『浄土の観念』として出版されるが、これもやがて大谷派正統教義に反するというところで、僧籍削除問題へと発展するのである。

この講演で金子は、三つの視点から浄土を確かめようと

する。それは①観念界としての浄土②理想としての浄土③実在界としての浄土、である。金子は「此の現実の世界を本当に見徹し現実のこの世界に目を覚す時に丁度此の現実の世界を照す如く現れる世界がある、即ち観念の世界である、観念の世界こそはある意味において本当の客観の世界でありませう。」と述べる。ここで「現実の世界を照らす如く現れる世界」に、観念と実在が融合する世界としての浄土がある。金子が異安心であると指摘されるとき、このように浄土を明確に「実在」として語ろうとした意図は全く理解されることなく、「観念」という言葉のみが注目されたようである。しかもその際、金子が「観念」と語る意図さえも正確に理解されず、追放となるのである。そのような浄土を金子は「それはまだ吾々の見ぬ現実の国であり、同時にまた懐かしき魂の郷里である。」(『彼岸の世界』)とも言う。見たことはないけれども人間が帰るべき懐かしい故郷として浄土を説いたのである。

### むすび

両者の浄土理解に対して、当時共通の質の批判が『中外』に寄せられている。それは野々村に対する澤延常、金子に対する多田鼎の批判である。「一文不知の尼入道など

は、到底及びもつかないが、余程思索になれたものでなければ理解できないやうな「真宗学」ができあがるのであらう。(澤延常)」、「真宗をば一個の内観哲学たらしむる者、少くとも真宗をば所謂聖道の一部門たらしむる者である。決して凡愚往生の本義を全うする者ではない。(多田鼎)」という批判である。澤も多田も、近代的真宗教学が「一文不知」あるいは「凡愚」の救済を見出した親鸞思想と遊離していく事態を憂慮する。論理主義にせよ内観哲学にせよ、それは「いなかのひとびと」を「われら」とし、「文字をもしらぬひと」を「まこと」とする親鸞の態度にそぐわないと批判するのである。これらは冒頭の大桑に共通する指摘であると言えよう。野々村は浄土を排除した上で近代教学を確立しようとし、金子は浄土を観念の世界として再び顕在化させることで近代真宗教学の道を開いた。しかし、その双方が、同じ質の問いを投げかけられるのである。そして現代真宗教学も、「民衆」を見失ったものとして、同じ問いを受けるのである。

このような状況を見たとき、「浄土」とは何かは、単に浄土を浄土としてだけ考えていくのではなく、以上のような論争を通して明らかになった課題にまで深められ、考えられていく必要があるものと思われる。つまり、問おうと

している主体や学問自体が、今一度問われなければならぬ  
いのではないかということである。その問い直される視点  
は何かと言えば、人間にとつて宗教とは何か、真宗とは何  
か、そして親鸞とは誰であるのかである。これらを根底か  
ら確かめていくことがなければ、浄土思想の現代に於ける  
意義も明らかにならないのではないか。以後、検討をすす  
めていきたい。